



[令和元年 12 月 11 日 定例会発表要旨]

## 前田と周辺地区の歴史拾い読み

手稲郷土史研究会 会員（会長） 永井道允

私は前田に住んで 45 年、前田を中心に手稲駅周辺が短期間に劇的に変化する様子を見てきた。歴史は時の流れに沿って語られるのが常であるが、今回は地図や航空写真の比較で空間的な変化としてとらえてみた。

大きな変化を可能にした要因として、次のことが考えられる。

① 広い平坦な土地があった ⇒ 大型店舗や公共施設の建設用地に最適、広い駐車場の確保が可能。高度経済成長期と重なり モーターリゼーション（自動車の大衆化）にも合致した。大型スーパーが複数できたほか、手稲区役所、手稲区民センター、手稲保健センター、手稲区体育館、曙図書館、曙温水プール、手稲溪仁会病院、北海道工業大学（現 科学大学）、前田森林公園、手稲稲積公園、運転免許試験場など公共施設も集中。

② 交通の便がよくなった ⇒ 手稲駅北口の開設、下手稲通の開通、石狩手稲線の改良、JR バス・中央バスの運行（一時は市営バスも走行）、手稲駅発着 280 本の電車（乗降客は札幌駅、新千歳空港駅に次ぐ道内 3 位に）。

③ 近接地域の人口増加 ⇒ 稲積・曙・花川・花畔の各地区に宅地造成と建築ラッシュ。戸建団地・高層マンション・アパート・市営住宅が相次いで建つ。

手稲駅北口周辺の変遷は、下段の航空写真でも見て取れる。かつての国鉄アパート〈左写真矢印・P.2 地図①〉は 4 階建 13 棟 320 戸の規模で地域集中暖房という施設だったが、老朽化に伴い解体。跡地にはまず天然温泉「極楽湯 手稲店」が開店。その後「ジェイアール生鮮市場」が開店、店舗は小さく時間帯によってはカートが空くの待つ客が並んでいた。10 年後に新店舗が開店し多少は大きくなったが、相変わらず混雑している。ドラッグストアに菓子店やカフェ、サービス付き高齢者住宅、耳鼻咽喉科や泌尿器科の医院もできた。広い駐車場がいつも車でいっぱいである。



昭和 50 年の手稲駅北口周辺 〈地理院 HP より〉



現在の手稲駅北口周辺～空き地はほとんどない 〈Google より〉



昭和 50 年の前田周辺の地形図

する人にとって「ばんなぐろ花畔人道橋」を使わず駅を利用できる恩恵は大であった。しかし、“南北格差解消”とはいうものの一旦は南側にある駅舎（2代目駅）で切符を購入したり、改札を通過してホームへ出たりという不便なものであった。そのうちに3代目の橋上駅ができて、利便性は格段によくなる。さらに改修を重ねて平成14年に自由通路「あいくる」もでき、キテネビルまで空中回廊でつながり、現在の4代目橋上駅になった。

現在の溪仁会病院の辺り（地図④）は水田があり、カエルが鳴く場所であった。昭和62年開院以来、次々と診療科を増やし現在は36科となり、増築に次ぐ増築を重ねてきた。立体駐車場の屋上は、ドクターヘリのヘリポートとなっている。JR駅に隣接という地理的条件からか、後志や石狩の各市町村からの患者も多いと聞く。高度の医療を提供するという一方で、紹介状を持たないと選定医療費を徴収される。敷地の一角に溪仁会ビルと命名された3階建の建物がある。かつては家電量販店のビルであった。現在は医療法人本部や経営管理部門が集中して入居していて、溪仁会病院の頭脳部ともいえる施設となっている。

東洋木材（現トーモク）（地図⑤）は昭和36年に銭函から移転し段ボールを生産していたが、平成7年に石狩湾工業団地に移築した。跡地は188戸の宅地となり、一部にはトーモクの子会社のスウェーデンハウスの建物が並び北欧風の雰囲気漂わせている。

残された緑の一角（地図⑥）は手稲駅北口通と石狩手稲線がT字路となる一等地、何ができるのか関心を持っていたが、最初にできたのは「溪仁会家庭医療クリニック」、続いて同系列の特別養護老人ホーム「つむぎの杜」、最近になって「労働金庫手稲支店」や60数戸の戸建住宅ができた。

手稲郵便局裏（地図⑦）も101戸の宅地が造成され、戸建住宅が建ち始めている。これが前田最後の住宅地ではないだろうか。

北海道科学大学は、前身は大正13年に創立された自動車運転技能教授所を起源とし、昭和42年に北海道で唯一の私立の工学系単科大学として開学する（地図⑧）。工学部機械工学科・経営工学科から始まる。現在は工学部・薬学部・保険医療学部・未来デザイン学部の4学部13学科と短期大学からなる。ちなみに平成31（令和元）年度在籍数は学部1,108名、博士課程26名、短大75名。小樽の桂岡にあった系列校の北海道薬科大学を統合し、薬学部を設置した。



## 【参考】

## 「前田の歴史」あんなこと こんなこと

手稲郷土史研究会では 地域で行われるさまざまな事業にも協力しており、倉本道新販売店（前田 8 条 10 丁目）が発行する ミニコミ紙『前田新聞<sup>とんぼ</sup> 蜻蛉』への 会員によるコラム執筆もその一つでした。前田地区に関わりのある記事を同紙より転載します。12 月の当研究会定例会における 永井道允会長の研究発表「前田と周辺地区の歴史拾い読み」の抄録と併せてお読みください。

●前田農場「東宮駐輦記」碑 …… 前田地区の地名となっている前田は、明治 27（1894）年に旧加賀藩の前田利嗣侯が開いた前田農場に因んでつけられたものです。前田農場は畑作だけでなく、当時としては先進的で大規模な酪農経営を行い、国内でも高く評価されていました。牛乳は味が濃いと評判で、とくにバターは品質や味が良く、東京や大阪等で高級品としてよく売れたそうです。



修復・移設された  
「東宮駐輦記」碑

明治 44（1911）年、のちの大正天皇が皇太子の時に前田農場を視察し、関係者を激励したことがありました。農場では その栄誉を後世に残す目的で「東宮駐輦記」碑を事務所敷地内に建立しました。農場の閉鎖に伴い、石碑は管理人の敷地内で 存在を知る人も少なく ひっそりと建っていました。

平成 25（2013）年 2 月、宅地造成工事により、瓦礫として処分される寸前の石碑を 手稲郷土史研究会の会員が発見しました。急ぎよ、前田家や土地所有者と交渉に当たり、その石碑を同研究会が譲り受けることになりました。その後、札幌市をはじめ温かいご理解とご厚意に満ちた方々のおかげで、ゆかりの深い前田公園の一角に移設保存されることに決まりました。

同年 10 月 5 日、前田公園において多数の関係者が見守る中で、移設された「東宮駐輦記」碑の除幕式が行われました。後日、札幌市の手により 石碑の解説標も設置されました。前田の貴重な歴史遺産として、未永く保存されることでしょう。

～『前田新聞 蜻蛉』2016.4～

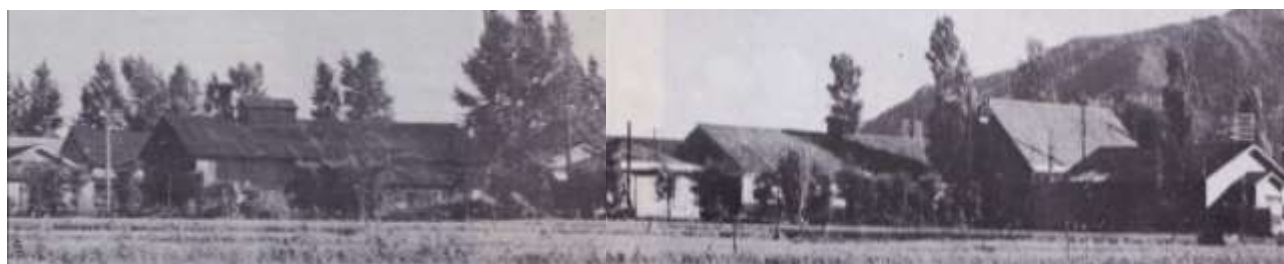
●日本石油北海道製油所 …… かつて、手稲区役所や北口通辺りに、日本石油の製油所がありました。製油所が建設されたのは明治 45（1912）年で、揮発油・灯油・軽油・機械油・重油など、道内唯一最大の石油精製施設でした。また、蒸留装置のほか、貯蔵タンク・倉庫・製缶など多数の関連施設も備えていました。

石狩川河口北岸の高岡地区を中心に採掘された原油を、埋設した送油管で花畔・花川を經由し、製油所まで送っていました。石狩産の原油のほか 勇払や宗谷の原油もタンク車で軽川駅に運び 精製処理していました。製品の供給地は道内だけでなく樺太にまで及んでおり、その量は年間 6,000～7,000kl にもなりましたが、原油産出量不足で、冬期間は製造を休止するという事もありました。

昭和 20（1945）年 7 月 15 日、米軍機が製油所を爆撃しました。直撃は免れたものの、誘発火災でタンク 7 基が炎上、製油所の一部も延焼しました。タンクは三日間にわたり燃え続けたそうです。

戦後は 産出油減少の問題を抱えながら細々と操業していましたが、昭和 25（1950）年 6 月限りで操業を休止しました。社会の変化は激しく、大型タンカーで安い外国産原油を輸入し、大量生産に変わり、小規模の製油所は あっという間に消滅してしまいました。

～『前田新聞 蜻蛉』2015.7～



在りし日の日本石油北海道製油所 〈前田小学校開校 5 周年記念『郷土誌まえだ』(1982 年) 口絵写真より転載〉

## 「手稲記念館開館 50 周年記念 講演会」のお知らせ

1969（昭和 44）年 12 月竣工の「札幌市手稲記念館」（西区西町南 21 丁目）が、開館 50 周年を迎えました。これを記念し、「むかしむかし、手稲町という素敵なマチがあったとさ」と題する講演会が下記のとおり開催されます（主催：札幌市市民文化局文化財部文化財課・共催：手稲記念館管理運営委員会）。旧手稲町の歴史や自然をテーマに 4 名の専門家が登壇予定で、手稲郷土史研究会の会員にとっても見逃せない内容です。参加無料、要申し込み。足を運ばれてみてはいかがでしょうか。

- 日 時 / 2 月 16 日（日） 14:00～16:10（開場 13:30）
- 会 場 / 札幌市生涯学習センター「ちえりあ」2 階 大研修室（西区宮の沢 1 条 1 丁目）
- 講 師 / 山崎真実氏（札幌市博物館活動センター）～「手稲の自然」  
藤井誠二氏（札幌市埋蔵文化財センター）～「手稲の遺跡」  
松岡洋一氏（札幌市文化財保護指導員）～「記念館の展示物から」  
田山修三氏（北海道教育大学特任教授）～「手稲村から手稲区へ」
- 申込先 / 電話 または ウェブサイト上にて受け付けます。札幌市コールセンター（☎ 222-4894 <https://www.callcenter.city.sapporo.jp/sapporo/cc/web/formList.html>）へ、1 月 8 日（水）～2 月 7 日（金）、  
①行事名「手稲記念館 開館 50 周年記念講演会」、②氏名、③郵便番号・住所、④電話番号、  
⑤参加人数（複数で参加する場合）、⑥メールアドレス（ウェブサイト利用の場合）を明示のうえ、お申し込みください。
- 定 員 / 100 名（定員を超えた場合は抽選）



手稲町と札幌市との合併（1967 年）を記念し 1969 年に建てられた「札幌市手稲記念館」

### 遺構・遺物は語る

#### 手稲で一番はじめにできた工場

「二十四軒手稲通」を運行するバスの「富丘 2 条 6 丁目」停前に、年季の入った木製の門柱があるのをご存知ですか。近代的な高層マンションの敷地にはあまり似つかわしくない(?) これは、手稲で最初にできた工場『乙黒製油所』の遺構です。

山梨県で“菜種油”の製造に携わっていた初代 乙黒定七氏が 北海道の良質な原料を求めて 来道し、1902（明治 35）年、三樽別（現 富丘）にて創業。三樽別川の水を動力源に、製油の



1980 年代の乙黒製油所（『郷土誌 がる川』より転載）



木製の門柱

ほか、精米や製粉も行っていました。

明治末期に建てられたという煉瓦造や木造の建物は 1999（平成 11）年に失われましたが、地域の産業史を古き門柱が今に伝えています。

※『手稲町誌(下)』（札幌市 1968 年）、『手稲開基 110 年誌 手稲の今昔』（手稲連合町内会連絡協議会ほか 1981 年）、『郷土誌 がる川』（手稲中央小学校開校 100 周年記念事業協賛会 1984 年）などを参考にしました。

次回定例会 ⇒ 発表内容「手稲開基となった仙台藩白石支城の入植」 / 村元健治（手稲郷土史研究会 会員）  
2 月 12 日（水）13:30～ / 手稲区民センター 3 階 視聴覚室 / 当研究会の会員でない方の聴講も可